

# わが心のふるさと岐阜と野球の思い出

青木純忠（揖斐郡大野町出身）



## 1. ふるさと夏の思い出

私が生れてまもなく終戦を迎え、今は韓国になっていく地から母と祖父のふるさと岐阜に引揚げてきました。幼少期から中学一年までは、揖斐郡大野町で育ちました。その頃の大野は、あたり一面にのどかな田園風景が広がる小さな田舎町で小高い山や根尾川の支流の藪川の川原などが主な遊び場でした。

一番の思い出は、親父の夏の趣味「鮎漁」について行き、火ふり漁の刺網（通称テエナ）、投網とみなどさまざまな漁法を駆使し、ビックリするほど大漁の鮎を獲ったこと

とで、しかもそれが、たびたびあったことです。最高で4貫500匁の記録があります。隣近所や知り合いにバケツ一杯ずつ配っても配りきれないほどの量が現在ではとても考えられないおおらかでのんびりした時代でした。

が、その後は（翌年辺りから）規制が厳しくなったのか、それとも乱獲で資源が減ったのか夕食の膳に鮎がドッサリという光景には、なかなかお目にかかれなくなったそうです。

## 2. 転校と野球

中学二年になって、そんな田舎から都会（？）岐阜のと真ん中にある街に引っ越すこととなり、岐阜高生輩出者数県下一の市立明郷中学校に転校しました。

同校は、転校後の通知表が概ねワンランク下がるほどのレベルの高い学校で些かの焦りとカルチャーショックに見舞われたことを今でも鮮明に憶えています。塾や家庭教師をつけて勉強させられることは

当たり前、岐阜一の繁華街柳ヶ瀬を校下にもつ中学ですから見聞きすることすべて

が別世界、以前とは180度違う環境のなかを彷徨い歩いてたと記憶しています。

（その後、明郷中学は統合され、学校名が無くなっていくことを在京同期会で知り、ちよっぴり寂しい思いをしています。）

しかし、田舎者の私は、相変わらず好きな軟式野球を続け、勉強は仲間が遅れない程度に付いて行ければ良いと思っていました。

私は、私自身の性格を「一喜一憂せず、何事にも諦めず、黙々とマイペースで取り組み、ピンチにも動じない心を持っている」と分析しています。



若干美化していて気恥ずかしいところもありますが、このおかげで著しい環境の変化にも耐え切れたのだと思います。

そして、これが形成された素地は、揖斐郡大野の環境が育ててくれたのではと、大野こそが自分探しの原点だと、かたく信じています。

### 3. 岐阜高校と甲子園出場

そんなこんなで知らぬ間に岐阜高校生となり、ここでもすべに野球部に入部しました。同校は、いわゆる進学校、毎年、決して精鋭ではない部員も混じりこんだ極めて少ない部員数のなか、岐阜高伝統の少数精鋭を信じ込んで練習に明け暮れる毎日でした。

やはり、信じることはとても大切なことで、我々が最上級生となる二年生の秋季県大会では破竹の連戦連勝で野球の名門岐阜商とともに岐阜県代表として秋季東海ブロック大会出場を果たす幸運に巡り合いました。

東海大会の準決勝では、相手の中京商業がエースを温存するなど、我々ナインの反撥心を極度に刺激してくれたおかげもあって、なんと5対3で勝ってしまい、決勝で再び岐阜商業と合間見えることとなりました。岐阜の早慶戦の再現です。

この試合は残念ながら敗北しましたが堂々たる準優勝。選抜確定とはいきませんが、より厳しくなった練習にも耐えうるだけの大きな目標ができました。

私にとっては、口よりも手が先に出た厳しい父親が小学生の私に買ってくれたグローブと樫の木を削ったバットで教えてくれた「野球」が奇跡のように花開いた瞬間でもありました。

そして、今からちょうど半世紀前、私の母校岐阜高校は、晴れがましくも第34回全国選抜高等学校野球大会が開催される高校球児の憧れの地、甲子園球場のフィールドに立っていました。

新チーム結成以来4ヶ月足らずで選抜大会選出の選考基準となる秋季東海ブロック大会に出場し、部員数僅か12名で戦い抜き、見事準優勝を勝ちとって、

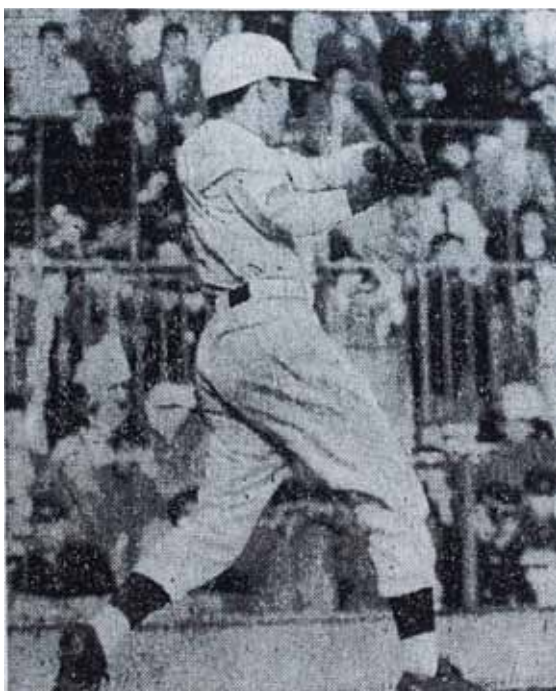
岐阜高<sup>※</sup>2回目の選抜大会出場を決定づけ、名門岐阜商と「岐阜県初の選抜ダブル出場」というオマケまで付いた記念すべき年となりました。

これだけでも神がかりな快挙でしたが、さらにドラマチックな展開は、母校に貴重な選抜大会初

勝利をもたらしたばかりか、今年68歳になる私の人生に大きな影響を与えたエピソード・メイキングな出来事となりました。

### 4. 大番狂わせの甲子園初勝利

甲子園の初戦の相手は、同大会優勝候補筆頭の下馬評高い桐蔭高（和歌山県）、近畿代表、前年夏の大会準優勝校・・・しかも悪いことに準優勝時のメンバーが7人も残っているという超強豪校に決まり、戦う前から「初戦敗退必至」の雰囲気です。ムは始まりました。試合展開も戦前の予想通り1対3で8回まで推移し、敗色濃厚な9回表2死1・2塁の場面で、最後の打者として私に打順が巡って来ました。相手投



起死回生の三塁打



前列左から2人目が筆者

手の初球を無心で振った私の一振りは、左中間を深々と破り起死回生の同点3塁打となり、その勢いが10回表の4番打者の勝ち越しツーランホームランに繋がり、正に大番狂わせの5対3で劇的な岐阜高春の選抜大会初勝利をもぎとることができました。絵に描いたような「野球はツードウンから」を地で行ったドラマでした。

更にツキ男私にとって幸運の極め付きは、母校初勝利のウィニングボールが私の

ファーストミットに吸い込まれたことです。誰もが「野球の神様のイタズラ」だと思われたに違いない光景であったことが今も新鮮に蘇ります。この僅か8ヶ月足らずの誠スリリングで、神がかり的なシーンは、数多くの教訓を17歳余の若僧に与えてくれ、今も懐かしい心の思い出となっています。

## 5. 高校野球が教えてくれたこと

何よりも①「チームワーク」の大切さ、②勝利の方程式には全員に「考える野球のセンス」が必要であること、③ネバーギブアップの精神で取り組めば巨木をも倒す「力と勇気」が湧き出てくること、④先人が積み重ねられた伝統・多くの有形無形の支援をいただいた父兄やOB・在校生への「感謝の心」、⑤岐阜高生特有の限られた練習時間での「集中力と個々の努力」などは、学校で学ぶどんな知識よりも勝るとも劣らないもので、十分に実社会でも応用ができる当時のメンバーにしか味わうことが出来ない貴重な体験でした。

これに加えて、非力な私に「誇りと自信」を与えてくれたのは、試合に勝っても負けても応援団の皆様から聞かせていただいた伝統ある⑥「岐阜高校歌」でした。

これら6つのキーワードは、その後の岐阜を離れた50年間で遭遇したいくつかの

試練を、無難に乗り越えさせてくれ、今日までの大きな心の支えとなったことには間違いないものとなりました。

## 6. これからは？

一損保マンとしての社会人生活をリタイアして4年余りとなりますが、幸いにも体力・気力ともまた衰えを感じておりません。わが心のふるさと岐阜と野球（スポーツ）を通じて培った幾多の経験と教訓は、今も私の大切な宝物として確実に根づいております。

最近では居住する横浜市のコミュニティハウスで知り合った小学生野球チームの監督から「チームコーチを引き受けて欲しい」との話が舞い込んできました。私の岐阜高・大学で培ったささやかな経験が、スポーツを通じて健全な青少年育成に少しでもお役に立てば、これ以上の幸いはありません。コミュニティハウスでの地域住民へのお手伝



右が筆者



いととも、お世話になった社会の皆さんに少しでも恩返しができるチャンスをいただいたとの感謝を胸に、無理をせずに子供達と炎天下で汗を流しています。

こうして小・中学校時代に熱中した野球、甲子園での初勝利をもたらしてくれた野球が、新たなフィールドで芽を吹き、人生最後の締めくくりも野球と予期せぬ方向で復活することとなりました。

《注》

※春の全国選抜高等学校野球大会初出場は、昭和30年の第27回大会。一回戦で高田高に1対0で惜敗。(因みに、夏の全国高等学校野球大会は、過去昭和24年に輝く準優勝、昭和29年一回戦敗退と2回出場)

《略歴》

- 青木純忠(あおき すみただ)
- ・ 揖斐郡大野町 岐阜市出身
- ・ 昭和38年岐阜高卒
- ・ 昭和42年愛知学院大学卒(硬式野球部主将)
- ・ 日動火災海上保険(株)入社 本社総務部担当部長、  
 神奈川損害調査部長を歴任
- ・ 日動損害調査(株) 常務取締役
- ・ 東京海上日動調査サービス(株) 執行役員



左から6人目が筆者